

ヘーゲルにおける古典派経済學の把握

大野 精 三 郎

I 問 題

II Hegel 哲學の本質的諸特徴と精神哲學の位置

I

戦後ふたたび Marx と Hegel との関係が問題となってきたことの理由のひとつとして、この2人の巨人についての新資料が1930年代に発見され、刊行されたことがあげられるであろう。すなわち Marx の側においては、かれらの學說形成の初期に書かれた『經濟學・哲學手稿 1844 年』が1930年代に完全な形で刊行され、これによって唯物論をその成立において捉えることが可能となったばかりでなく、その関連において Hegel 哲學の批判が重要な契機をなしており、Marx の『精神現象學』にたいする批判がはじめて明らかになったからである。他方、Hegel の側では、『精神現象學』の刊行以前に書かれた社會哲學、論理學などの遺稿が¹⁾、ほぼ同じ年代に発見され、刊行されるに至ったからである。この遺稿のうち社會哲學の部分に屬するものは、哲學者 Hegel による近代

1) ここで問題とする Hegel の論文・手稿は、つぎのものである。

1) 1802—3年の『自然法論 *Über der wissenschaftlichen Behandlungsarten des Naturrechts...*』と『人倫の體系 *System der Sittlichkeit.*』テキストとしては、Lasson 編集のヘーゲル全集第7巻 *Schriften zur Politik und Rechtsphilosophie* 1913. を使い、Lasson として引用する。

2) イエナ大學時代における Hegel の講義草稿『イエナ實在哲學』1803—4年および1805—6年。Jenenser Realphilosophie. I, Die Vorlesungen von 1803/04. Aus dem Manuskript hrg. J. Hoffmeister. Lpz. 1932. Jenenser Realphilosophie II Die Vorlesungen von 1805/06. Aus dem Manuskript hrg. von J. Hoffmeister. Lpz. 1931. 以下前著を *Real Philosophie I*, 後者 *Real Philosophie II* として引用する。

III 精神哲學における經濟學の展開

IV 結 論

社會の分析の實質的部分をかたちづくり、これまでの Hegel の、どの著作よりも豊富な經濟學的分析でみたまされている。もちろん、これまで Hegel がイギリス古典經濟學の研究に従事したこと、とくに James Steuart を勉強し、そのドイツ譯にいくたの注釋をほどこしたことは、Hegel の傳記作者 Rosenkranz によって伝えられており、Hegel 自身も、晩年の著作『法哲學 1821 年』のなかで、Steuart, Smith, Ricardo, Say の名をあげているところから、その關心を窺うことができた。しかし、これらの研究がいかなる内容をもっているかについては注釋が紛失しており、またこれまでの資料では、Hegel 哲學の體系のなかでは、斷片にとどまっていた。社會哲學についての遺稿の発見は、この間隙を埋めたといつてよいであろう。

この遺稿の発見によって、Hegel 辯證法の成立が、その土臺として、近代社會の分析に負っていること、その分析が Marx の分析といちぢるしく相似性・親近性をもつことが明らかとなった。ここにおいてふたたび Hegel と Marx の関係が新たらしく論ぜられる端緒となったのである。この端緒となった Hegel の社會哲學の重要性を指摘し、それを辯證法形成の主要契機と考えたのは George Lukács の『若きヘーゲル——辯證法と經濟學の關連 1948 年』²⁾ であろう。Lukács は、その書物のなかで、Hegel はかれの辯證法を、資本家的經濟學の研究、資本家的社會の諸矛盾との對決、人間の歴史における労働の中心的役割の洞察から展開したという見解を明らかにしている。

2) この大著には、その精髓を要約した出口勇藏編『經濟學と辯證法 ルカーチのヘーゲル研究 1956 年』があり、われわれの接近が容易となった。

Lukácsによれば、Hegelは『かれの時代、すなわち資本主義の現實的・内部構造を、その現實的推進力を把握しようと努めた。……この對決は、おそらく、Hegel體系の全構造、かれの辯證法の特徴と偉大さを規定している³⁾』『おそらく、Hegelが展開した辯證法のあらゆる特殊な形態は、資本主義社會の諸問題、經濟學の諸問題にたいするこの對決から生まれたのである⁴⁾。』そしてHegelは『1805—6年の講義』のなかで、『労働という最も簡単な範疇から宗教・哲學という問題にまで、體系的・辯證法的に上昇してゆく研究をおこなった⁵⁾。』しかし資本主義社會の諸問題、經濟學の諸問題というとき、Hegelは當時のドイツの貧弱な状態を思惟のうえに反映したのではなく、フランス革命と産業革命の結果、イギリスにおいて最も發展した市民社會を思ひ浮べていた。すなわちこの問題においては、かれは、ほとんどもっぱらイギリスおよびイギリス經濟學についての文獻的知識に結びつけられていた。かれが自らつけくわえたものは、經濟的對立として認識される辯證法を意識的に哲學的水準にまで高めたことである。SteuartやSmithの弟子であったHegelは『Smithの經濟學の特定の諸範疇にふくまれる諸矛盾を追求し、それを、Smithのホリゾントをはるかに超える辯證法的意識にまで高めたのである⁶⁾。』そして、このような經濟學的分析を土臺にして、社會的上層物を、具體的・經濟的に基礎づける方向におけるこの展開は、『イエナ時代をもって終らなかつた。いな反對に、ひとは、Hegelにおけるこの傾向はますます大きくなっていることを把握することができる⁷⁾。』

Fritz BehrensはKarl Marxの生誕七十年を記念する『若きマルクスにおける政治經濟學の發展によせて⁸⁾』という論文および『ヘーゲルの經濟學的把握と諸見解⁹⁾』という論文のなかで、と

くに經濟學者としてのHegelの意義を明らかにすることに努めている。Behrensは、その多くの定式化において、Lukácsの把握を無批判的に踏襲しているばかりでなく、MarxにたいするHegelの先驅性を強調し、一面化している。Behrensによれば、Marx主義の發展は直接にHegelに結びついている。とくに、經濟學においてHegelは、Marx主義を廣範圍にまえどりしている。Hegelは、——Behrensの述べるところにしたがえば——『經濟學的思想家として、その時代の最も進歩した土臺のうえにたっている。』¹⁰⁾それは、かれをして當時の經濟學の水準を超えることを可能にした觀念辯證法にもとづくのである。すなわち『辯證法』の力がHegelをして『Smith, Ricardoより深く價值・貨幣の本質にまで迫ることを可能にしたのであった¹¹⁾。』しかし、それだけではない。『觀念辯證法にかかわらず、Hegelは、労働・價值・貨幣の本質および資本主義的生産の必然的發展傾向を把握するのに成功したのである¹²⁾。』かくて哲學者Hegelは、經濟學者Hegelとしてまた大きな功績を擔うことになる。すなわち『Hegelは政治經濟學の對象の把握の高さにおいて、古典派經濟學にまさる高さにとっていることが明らかとなる¹³⁾。』そしてMarxが古典派經濟學との對決をはじめたときに、MarxはかくてHegelとただちに結びつくことになる。『ここ(Hegelの經濟學的把握)から、Marxは出發した。そしてここにおいて、ブルジョア經濟學にたいするかれ

omie beim jungen Marx“ in Zs. „Aufbau“. Jg. 1953, Heft 5. および *Hegels ökonomische Auffassungen und Anschauungen in Wissenschaft Zs. d. Karl-Marx-Universität*, Jg. 1952/53, Heft 9/10. あとの論文は私は直接みることができなかったが、著者Behrensが批判に答えてかれの見解を要約したところによれば、内容的にはまったく同一である(Diskussion “Über das Verhältnis des Marxismus zur Philosophie Hegels” in *Deutsche Zs. für Philosophie*. Jg. 1954 Heft 4. Ss. 896—903.). まえの論文については、宮鍋職氏の適切な紹介がある(一橋論叢31卷3號1954年)。

10) *Ebenda*, S. 417.

11) *Ebenda*, S. 416.

12) *Ebenda*, S. 418.

13)14) *Ebenda*, S. 419.

3) Georg Lukács, *Der junge Hegel, Über die Beziehungen von Dialektik und Oekonomie*. Europa Verlag, Zürich-Wien 1948. S. 21.

4) *Ebenda*, S. 715.

5)6) *Ebenda* S. 412.

7) *Ebenda* S. 472.

8)9) „Zur Entwicklung der politischen Ökon-

の批判的對決をくわだてたのであった¹⁴⁾』と。このような Lukács=Behrens 的見解は、ふたたび Marx と Hegel との關係にたいし、國際的な規模での論戦をひきおこした。そしてこのように Hegel 遺稿の發見はわが國においても、Hegel にたいする關心を刺げきしているようにも思われる。Behrens の最後の一句は、マルクス學說の形成の史實¹⁵⁾に照らして誤りであることはいうまでもないが、わたくしの本論文における主題は、内外の諸研究¹⁶⁾に學びつつ Hegel の古典派經濟學の把握がいかなるものであったか、とくに Hegel が學んだといわれる Steuart と Smith 學說との關連を明らかにすることを目的とし、間接的には、そのかぎりでの Lukács=Behrens 的見解を内在的に批判することにある。しかし、Lukács も述べているように¹⁷⁾、Hegel はかれの哲學的體系の獨立な一部としての特別な經濟學をもたなかった。かれの經濟學的諸見解は、かれの社會哲學の一部を形成しているにすぎない。したがってわれわれの敘述も Hegel の體系に即しながら、そこに反映された古典派經濟學の把握がいかなるものであったかという間接的な接近の方法をとらなければならない。

II

さしあたってわれわれは、本論の理解を助けるかぎりでの Hegel 哲學の本質的諸特徴と、その體系のなかでの經濟學のとりあつかわれかたをみておかなければならない。

Hegel 哲學は、歴史的には、ドイツの後進性の

15) マルクス自身、自己の研究過程を、『經濟學批判 1859年』の序言のなかで、つぎのように述べている。ライン新聞での活動のなかで、はじめて物質的利害の論争に参加し、はじめて經濟學の勉強をはじめた。『研究』すなわち最初の經濟學の研究は、パリで、したがって1843年の終りから1844年のはじめまでおこなわれた、と(邦譯國民文庫版8—9ページ)。

16) Lukács, Behrens の前掲著書・論文および Herbert Marcuse, *Reason and Revolution*, London & New-York 1941. 邦語文獻としては、芝田進午『ヘーゲルにおける「労働」の問題(思想1953年5號)、山中隆次『初期ヘーゲルの市民社會觀—經濟觀を中心として』(一橋論叢35卷2號, 1956年)がある。

17) Lukács. *Ebenda*, S. 407.

ゆえに、フランス革命によって解放された理性のうえに合理的な秩序を建設することを目標とするドイツ的な表現であった。また、哲學的には、ドイツ觀念論の傳統のうえにたち、イギリス經驗論の批判に對抗して、『理性』の哲學を展開することを課題とした。

一方、イギリスは早くから個人を封建的隷屬から解放し、産業革命のなかで、その經濟的自由を實現していたし、フランス革命は、政治的に個人を隷屬から解放した。しかし、當時、政治的には國內が封建貴族によって領有されていた小邦に分裂し、經濟的に無力だったドイツ産業資本は、イギリスまたはフランスの道のいづれにも進むことができなかった。封建的隷屬から解放された個人を基礎として合理的な秩序を建設するという課題は、これを哲學にゆだねなければならなかった。他方、個人の理性(主観性)の構造は合理性の普遍的尺度を構成する普遍的法則や概念を生みだすことができるか、また普遍的合理的秩序を個人の自律性のうえに築くことができるかという哲學上の問題にたいし、二つを否定するイギリス經驗論に對抗して、ドイツ觀念論の傳統のうえで、この問題に肯定的に回答することが Hegel 哲學の課題となった。すなわち Hegel 哲學の課題は、普遍的法則や普遍的概念の客觀的存在を認め、個人の自律性のうえに合理的秩序を建設することが可能であることを明らかにすることであった。

Hegel によれば、フランス革命は現實にたいする理性の力を窮極的に解放した。しかし自由な主體の經濟的競争は、あらゆる個人の欲望の充足を保證する合理的な社會を建設することができなかった。むしろ逆に、人間は人間の所産である外的世界によって支配され、精神の『疎外』を示している。このような疎外を回復し、理性の統一と普遍性を確立することが哲學の課題となったのである。

ところで、Hegel に従えば、フランス革命の結果理性が現實を支配するに至ったというけれども、しかし理性は、現實が合理的にならなければ、現實を支配することはできない。この合理性は、主體が自然と歴史の内容そのもののなかに入りこむ

ことによって可能となる。その結果、客觀的現實は、主體の實現となる。Hegelがかれの根本的命題、すなわち、存在はその實體において主體であると要約したのは、この考えである。『主體としての實體』の觀念は、現實を、あらゆる存在の矛盾する力が統一されてゆく過程として理解することを意味する。『主體』は、單なる認識論的自我、または意識ではなく、存在のひとつの様式であり、對立の過程を通じて自己發展する統一的な存在である。存在するものはすべて矛盾的諸關係を通じて存立し續ける『自己』として働くかぎり、『現實的』なのである。したがって、存在するものは、それ自らに内在する矛盾を展開することによって發展する『主體』として考察されなければならない。しかし發展を包括し、そのなかに自己を實現できるのは、人間だけである。人間のみが自己を實現し、自分で決定する力をもっているのは、かれが自己の能力と『理念』の知識をもっているからである。人間の存在そのものが、かれの能力を實現させ、かれの生活を理性の『理念』にしたがって形成することができる。かくて理性、すなわち、現實に真理の知識にしたがって行動し、現實をその能力にしたがって形成する力は、『自由』を前提する。この究極の目標は、自己の發展の支配者であり、外界および自己の能力を理解する主體に屬しているからである。逆にいえば、自由は理性を前提する。というのは主體をしてこの力を得さしめるのは包括的な知識であるからである。『しかし人間は自分がなんであるかを知っている。——かくてのみ人間は現實的である。理性と自由とはこの知識がなければ、なにものでもない¹⁸⁾。』

理性は自由のなかで終結し、自由は主體の存在そのものである。理性はその實現を通じてのみ、それが現實的となってゆく過程を通じてのみ、存在する。理性は客觀的な力であり、客觀的現實であり、あらゆる存在の様式は、多かれ少かれ、主觀の存在様式であり、その實現の様式であるからである。對象は、それ自身において、主體の一種

であり、存在するものは、理性を實現する包括的な主體のなかに入りこむからである。かくて自然も自由の發展のための媒介となる。

理性と現實との直接的統一は存在しない。その統一は、歴史の長い過程を通じて、すなわち、人間が自己の能力を自己認識することによって生活し、行動する自由な合理的な主體として自己を確立することによって可能となった。かくて現實と可能性とのあいだに溝があるかぎり、現實的なものは、それが理性に一致するまで、働きかけられ、變えられなければならない。現實が理性によって形成されざるかぎり、それは言葉の眞の意味において現實的なのではない。それは『假象』にすぎない。現實的なものは、理性にしたがった形態においてのみ、はじめて現實的となるのである。ここに事物の發展を矛盾の展開とみる Hegel の辯證法が生まれるのである。しかしプロテスタンティズムの影響をうけ成長したドイツ觀念論は、これを個人の内面的な自由のなかで實現することで満足する傾向をもっていた。その結果 Hegel 哲學は、全體として概念と現實との妥協を計り、個人主義社會の原理を保持し、社會の現状にたいする自己批判的傾向を薄くしていたといつてよいであろう。

ところで、理性は、現存するものを包括し、包括される眞理にしたがって變える人間のたえざる努力のなかで、存在する。理性はこのようにみれば、本質上、歴史的な力である。理性を歴史において見たものが『精神』である。それは歴史的世界を人間の合理化との関連で見たもので、世界を人間の合理性の力によってたえず合理化してゆく過程とみたものである。歴史の過程は、理性の實現のいろいろの段階をあらわし、政治・社會諸制度、科學、宗教、哲學によって特徴づけられる。これを對象とするのが『精神哲學』である。

III

このような一般的立場のうえにヘーゲルの精神哲學が構成される。『人倫の體系』または『精神哲學』は社會における人間の意識的・目的的活動の全體をとりあつかう。文化は精神の領域である。

18) *Vorlesungen über die Geschichte der Philosophie*, hrg. J. Hoffmeister Leipzig 1938. S. 104.

社會・政治諸制度、藝術、宗教および哲學體系は人間存在の一部として存在し、作用し、それらのなかに存続する合理的主體の産物である。それらは、客觀的な領域をかたちづけていると同時に、人間によってつくられたものとして『主觀的な』ものである。そのことが、主觀と客觀との可能的統一を示している。これらの領域のなかで、主觀である個人がいかにして普遍的なものになるか、また普遍性の確立がなにによつておこなわれるかを明らかにすることが Hegel の精神哲學の課題をなしている。われわれは Hegel とともに、『精神哲學』の内部にたちいて、とくに經濟社會の分析に進んでゆかなければならない。

人間の歴史は、個人と自然との闘争からはじまらない。というのは個人は人間の歴史において後期の産物であるからである。共同體が、既存の・直接的な形態であるけれども、最初にあらわれる。それはまだ合理的な共同體ではなく、その性質として『自由』をもっていない。したがって、それはまもなく無数の矛盾に分裂する。Hegel はこの歴史世界における根源的統一を『意識』とよび、かくて、われわれが、すべてが主觀の性格をもつ領域に入ったことを強調している。

『意識』が歴史において最初にとる形態は個人的意識の形態ではなく、普遍的意識の形態である。その意識は、おそらく、あらゆる個別性が共同體のなかに埋没している原始的共同體の意識であると表わすことができよう。感情、感覺、概念は、本來的には個人的なものではなく、すべての人によって共有されるので、特殊なものではなく、共通なものが『意識』を決定するのである。しかし、この統一さえ、對立物をふくんでいる。意識はその對立物によってその諸對象へ到達するものである。確かに意識の對象としてのこれらの對象は、『包括された對象（概念された對象）』である。すなわち、主體からきりはなすことのできない對象である。對象が『包括される』ことは、對象としての性格の一部である。對立の二つの側面、意識と對象とは、精神の領域における他のあらゆる對立のタイプと同じく、主觀性の形態をとる。對立する諸要素の統一は、かくて主觀性の内部での統

一にすぎない。

人間の世界は——と Hegel はいう——一連の對立物の統一のなかで發展する。第1の段階では、主觀とその對象とは、意識とその概念の形態をとる。第2の段階では、それらは、他の個人との闘争にある個人としてあらわれ、そして、最後の段階では、それらは、國民としてあらわれる。最後の段階のみが、主觀と對象との持續的統一の達成を示している。國民は、それ自身のなかに、その對象をもっている。

この3つの段階に對應して、3つのことなる統一の媒介物、『言語』、『労働』および『財産』がある。言語は、そのなかで、主體と對象とのあいだの最初の統一が成立する媒介物である。それはまた、言語が客觀的であり、すべての個人によって共有されるという意味で最初の現實的共同體である。他方では、言語は個別化の最初の媒介物である。というのは、個人は言語によって、かれが知り、命名した對象にたいする支配をうるからである。人間は、自己の力のおよぶ範圍を劃定し、自己の世界を知るばあいにおいてのみ、それから他人を遠ざけることができ、自分の必要と力とを意識し、この知識を他人に伝えるのである。かくて『言語』はまた、占有の最初の推進者である。したがって、『言語』は、個人が仲間にたいして意識的な地位をとり、自己の必要と欲求とを主張することを可能にする。その結果ひきおこされる諸矛盾は『労働』の過程を通じて統一され、労働は、また文化の發展にとっての決定的な力となる。『1805—6年の講義』の労働の規定において、労働は、主體と客體とがおのおの二重になす辯證法的運動であることが示されている。すなわち客體は一方では本來持っていた特質をもちつづけるとしても、他方では人間が自分自身を疎外し自己を物と化す Sich-Zum-Dinge-Machen の過程である。他方では労働が直接性をすてること、自然のままの衝動的な生からぬけだすことを意味する。單なる欲望充足は對象の純粹な否定であつて對象の形態變化も欲望の發展をもたらさないが、人間が欲望とその充足とのあいだに労働介を在させてはじめて Hegel にしたがえば人間は人間となる。勞

働過程は統一のいろいろのタイプ——これらのタイプに對應する社會諸形態、『家族』『市民社會』『國家』にわかれる。この變化を通じて労働の様式は、Smith の分業論を踏襲する Hegel によれば、自分の欲望を充足することを目的とする個人の特定の作業を市場のために商品を生産する『普遍的労働』へ變化する。ここでは『ひとはもはや自分の使用するものをつくらない。あるいは自己、労働で得たものを使用しない¹⁹⁾』労働の生産物は『もはや主體にとっての欲望でなく、剰余であり、したがってその使用關係は普遍的なものであり、この普遍性を實在性においてみるならば、それは他人の使用關係である²⁰⁾。』

かくて Hegel の精神哲學はここでその現實的表現を獲得する。すなわち人間は労働によって主體的世界と客體的世界との溝を克服し、自然をかれの自己發展にふさわしい媒介とする。ここでは諸對象がもはや死せるものではなくその全體において主體の自己實現の領域に屬している。労働によって客體がとりあげられ、形態をあたえられ、それは對象のなかに主體の必要と欲望をみとめることができる主體の一部となるからである。他方、労働の剰余が交換されることによって、人はそのなかで個人としてあらゆる他の個人に對抗している個別的な存在であることをやめる。かれは共同社會の一員となる。個人はかれの労働によって普遍的となる。というのは労働はその本性そのものから普遍的活動でありその生産物はあらゆる個人のあいだで交換されるからである。このように『個別性がいかに普遍的なものになるか、なにによって普遍的なものの構造があらわれるか』という精神哲學の目標を明らかにしているからである。Hegel が『歴史哲學』において『意識はその終極の段階に到達した』というとき、このような單純商品生産者の立場からの基礎づけにはほかならない。かれの『法哲學』もまた法概念の哲學的解明からする單純商品生産者の自由所有の基礎づけにはほかならない。Hegel において現状で辯證法が停止しているといわれる所以である。

Hegel は述べている『個人は自己の欲望をかれの労働によってみたすのであるが、かれの労働の特殊な産物によってみたすのではない。特殊な生産物は、かれの欲望をみたすために、それとことなるものにならなければならない²¹⁾。』特定の對象は労働の過程において普遍的なものになる——それは商品となるのである。したがって普遍性は労働の主體、すなわち労働者とかれの個人的活動を變化させる。かれはかれの特定の才能と欲望とを無視することを余儀なくされる。労働の生産物の分配には『抽象的・普遍的労働』以外は問題にならない。『各人の労働はその内容からみれば、全員の必要にとって普遍的なものである²²⁾』労働はこのような普遍的活動としてのみ價值をもつにすぎない。その價值は『個人にとっての労働であるところにしたがわず、すべてにとっての労働であるところにしたがって²³⁾』決定される。

この抽象的・普遍的労働は市場における交換關係によって具體的な個人的需要によって結びつけられている。交換によって労働の生産物は、抽象的労働の價值によって個人のあいだに分配される。それゆゑ Hegel は交換を『具體物への復歸²⁴⁾』とよんでいる。それによって社會における個人の必要がみたされるからである。

あらゆる『つくられたもの』に共通なもの、そのなかでそれらの平等性が表現されるものは諸商品の『普遍性』としての社會的實體、價值である。『物としてのこの價值自體は貨幣である²⁵⁾』とかれは把握している。いろいろの労働はその概念を、その抽象を實現しなければならない。『その普遍的概念はいろいろの労働と同じくすべての人に一般的なものとして表象される物でなければならない。貨幣はこの物質的・實存的な概念であり、統一の形式である。すなわち欲望の對象となるすべての物の可能性である²⁶⁾。』

ところでこのような交換社會は、Hegel によれば、また『自然的欲望およびそのための労働と蓄

21)22)23) *Ebenda*, S. 238.

24) *Real Philosophie* II. S. 215.

25) *Ebenda*, S. 215.

26) *Ebenda*, S. 216.

19) *Real Philosophie* 1. S. 238.

20) *Ebenda*, S. 438.

積とに關する普遍的な相互依存の體系』とよばれるが、そこでは生産の盲目的、無政府性が支配する。

『誰もがかれの欲望の全體のためにそれ自身で存在していない。かれの労働がかれの欲望をみたす能力のあり方は、かれにこの充足を保證するものではない。個人が占有している剰餘が欲望充足の總體性であるかどうかはまさに疎遠な力にかかっているのであって、それにたいして個人は無力である。剰餘の價値、すなわち剰餘と欲望との關係を表現するものは、個人と關係なく、たえず變化する。

この價値全體は欲望の全體と剰餘の全體とに依存するのであり、全體は殆んど認識しえない・みることのできない・支配できない力である²⁷⁾』

『この體系においては支配するものは諸々の欲望とその充足の仕方との無意識な盲目的全體として現われる²⁸⁾。』したがって個別と全體との相互作用は一つの不斷に『上下する波』として現われる。そしてこの上下する波を通じて自動的に均衡が成立するとみる點において Hegel は Smith と見解を同じくしている。『剰餘と欲望とがつりあっていることは、そのものの價値それ自體から認識される²⁹⁾。』この『均衡という抽象は諸欲望の總體性にたいする適合性をもはやもたないある種の剰餘がふたたびこの適合性を得ることを十分に保證するものである³⁰⁾。』

しからば資本性生産の發展はどのような矛盾を生みだすであろうか。Hegel はこの點において労働の規定から出發して道具—機械の發展によって、労働の性質が個人の自己實現から自己否定に變化することを示すとともに、他方、欲望の無限の多樣化によって富の蓄積がおこなわれることを示すことによってあとづけている。

まえの點について。人間は労働によって自然の客觀的合法則性を發見し、自然のなかにかくれている客觀的な因果關連をみいだして協力させ、それによつて分業—道具—機械が發展してゆく。道具と機械との區別を單に労働用具の分化と考へた

Smith にくらべて、Hegel はこの點で一層の前進を示している。Hegel は分業、道具、機械によっておこる運動について書いている。『一般的な熟練にたいして、個人は自己を特殊者として措定し、みづからを普遍者からきりはなして他のものより、みづからより熟練し、かつみづからより便利な道具を發明する。しかしかれら特殊な熟練において普遍的なものであるものは、ひとつの普遍的なものの發見である。そして他の人びともそれを習得することにより、その特殊性は揚棄されて普遍的な財が生まれる³¹⁾。』

かくて道具では人間の活動はなんらか一般的、形式的なものとなる。しかし『人間の活動は残る』。機械によってはじめてこのなかに質的變化がおこる。機械は人間自體からこの形式的活動を揚棄し、それをかれにたいして全體的に活動させる。しかし『人間が自然にたいして強制するところのかの偽瞞は、かれがその個別性のなかにとどまるかぎり、……やがて人間自身にたいして復讐してくるのである。すなわち人間が自然を抑壓すればするほど人間が自然からかち得るものは、より價値低くなるのであって、人間はいろいろの機械で自然に加工することによって、自己の労働の必然性を揚棄せず、労働を自然から遠ざけ、人間がもはや自然に生き生きとむかわない。』労働すること自體がますます機械的になる。かくて人間は全體にたいしてのみ労働の必要を減少させるが、しかし個人にたいしてはそうではなくむしろ労働を増大させる。というのは労働が機械的になればなるほど労働はより僅少な價値しかもたず、人間はこのようなしてますますよけいに労働しなければならないからである³²⁾』

ところでこのような生産力と社會的分業の發展の相互作用を明らかにし、欲望の發展を明らかにしている。『諸欲望はかくて多面化される。それぞれの欲望は多くのものに分割される。趣味は洗練され、ますます差別的になる³³⁾。』

しかし、資本制經濟を特徴づけるものは、商品

27) *Lasson*, S. 488.

28) *Lasson*, S. 489.

29)30) *Lasson*, S. 490.

31) *Ebenda*, S. 236.

32) *Real Philosophie* I. S. 237.

33) *Real Philosophie* II. S. 231.

經濟を基礎・土臺としながら、そのうえで『剰余價值』の生産であることである。『資本主義とは、すでに人間労働の生産物だけでなく、人間の労働力そのものもまた商品となる時期の商品生産の發展段階を意味する³⁴⁾』『このようにして資本主義の歴史的發展においては、2つの契機が、すなわち(1)直接生産者たちの現物經濟の商品經濟への轉化と(2)商品經濟の資本主義的經濟への轉化とが重要である。第一の轉化は社會的分業—孤立分散した〔注意—これが商品經濟の必須條件〕個々の生産者たちがただ1つの産業部門に従事して専門化すること——があらわれることによっておこなわれる。第2の轉化は個々の生産者たちが各々の單獨で市場のために諸商品を生産し、競争の關係へ入ることによっておこなわれる。各生産者は、より高く賣りより安く買おうとつとめる。その必然的結果は强者の強大化と弱者の没落、少数者の富裕化と大衆の零落である。これが獨立生産者たちの賃銀労働者たちへの轉化と多数の小經營の少数の大經營への轉化に導くのである³⁵⁾』このように資本制生産は労働条件の所有者と労働力のみ所有者の對立のうえに展開される。

Smithと同じくマニファクチュア分業と社會的分業とを同一視する Hegel においても、單純商品生産の資本制商品生産への發展は、單に量的な發展となり資本制商品生産の特殊な質的規定が把握されない。すなわち道具から機械への發展も労働がますます抽象的になってゆくという過程としてしか捉えられていない。しかし、理論の内容からいってこの把握の仕方の違いが Steuart と Smith の經濟學の段階的相違を示すものではないであろうか。この點が本稿の主要な論點であるから詳論しなければならない。Steuart の經濟學説は『重商主義の合理的な表現』とよばれているが、それは當時の資本制主義の發展に照應するものであった。『その時代の本來のブルジョア的領域は商品流通の領域であった。だからかれはこの原基的な領域の視點からブルジョア的生産の錯雜

した全過程を判斷し、そして貨幣を資本と混同したのであった³⁶⁾』このような立場において富の源泉が對象から商業的および工業的活動に移された。それは、貿易差額の受取超過のため労働による剰余價值の生産が目的となったことを意味する。この立場は流通過程を $G-W-G'$ として把握しているのであるが、 G' を生むための W の増大の必要から労働の意義を認めてきた。しかしこの労働は流通の立場から、その生産物が、貨幣へ轉化するかぎりはじめて普遍的・社會的労働という表現を受けとり、價值として把握されているにすぎない。

かかる流通主義的な労働把握においては初めから労働の生産物それ自體が價值をもつという認識は否定されているのであって、そのばあいには價值の大いさ、價值増進を問題とするならば、當然やはり流通主義的に『賣り渡しにもとづく利潤』が考えられる。それゆえに重商主義的に合理的表現をあたえようとした Steuart は個々の資本家のすべての利潤は賣渡しによって得られる利潤として把握している。つまりかれはかかる相對的利潤は「當事者における富の平衡の動搖」によるのであって相對的であるにすぎないから國內商業自體はその國の富の源泉とはなりえないのであって、ただ出超バランスとしての外國貿易のみが富の源泉となりうると説くことによって『重商主義に合理的な表現』をあたえているのである。

したがって Steuart における『剰余を生む農業』と『單に生存手段を生産するにすぎない農業』との區別は、生産物が貨幣へ轉化するかぎりでの觀點が注目されたのである。つまり生産物が普遍的・社會的労働を表現している現象面から捉えられているにすぎない。したがって剰余を生む農業『一般的等價物を創造する労働』が重視されるのである。しかしこの労働はかならずしも近代的な労働であることを要しない。Steuart において生

34)35) レーニン『いわゆる市場問題について』邦譯レーニン全集(大月書店刊)第1卷, 89—92 ページ。私はこの原著をみることができなかつた。

36) Marx, *Zur Kritik der politischen Ökonomie, besorgt vom Marx-Engels-Lenin Institut, Moskau* 1934. 邦譯國民文庫版 198 ページ。なお時永淑『アダム・スミス價值論の意義と限界(一)(二)』(經濟志林 22 卷, 3・4 號)はスミスにおける價值論成立の意義を産業資本の確立に求め、示唆的である。

産物の價值分析および「利潤」「賃銀」「地代」の基本範疇が不分明なのはそのためである。それはまた Steuart の學説の立脚していた地盤を明らかにしている。

Steuart にあっては「利潤」にたいして「労働の價額」という用語があらわれながら、賃銀と明確に區別されていない³⁷⁾。これはかれの學説が獨立の小商品生産者を十分に分解していない地盤にたっていることを物語っている。等價物を生みだす勤勞の擔い手である勤勞者 the industrious とは勤勞貧民 the industrious poor あるいは下層階級 lower class であるとともに利潤によって富む製造者 manufacturer であったことがこのことに照應している³⁸⁾。

しかし、Smith はマニファクチュア分業と社會的分業とを混同したとはいえ、資本制生産の特徴を、労働條件の所有者と非所有者との對立、資本と労働の對立としてとらえ、剩餘價値の一般的範疇の確立に近づいているのである。そして資本制生産の分析をはじめたのであった。Hegel が『諸欲望の體系』としてとらえた市民社會は、Smith とちがい、『餘剰と餘剰との交換の體系』であり、したがってその労働把握は、生産の過程での把握ではなく、生産物が商品流通に入るかぎりでの價值表現をうけるにすぎないという Steuart の把握に照應するものであって、この點から Smith の把握以上に、労働の本質把握に到達したという Behrens の把握はゆきすぎであるばかりでなく、誤っている。したがってまた、Hegel が貨幣を物として、價值の社會的實體を表現しているところから、Behrens のいうように、Hegel が古典學派より深き把握に到達したことを示すものではない。Hegel は労働の把握において示されるところから明らかなように貨幣を商品の二種の性質から導いたのではなく、むしろ價值表現の質的方面のうえに、貨幣をその完成した表現とする商品の等價形態のうえに重心を移し、貨幣すなわち富という重商主義的見解をとっているのである。

37)38) James Steuart; *Principles of Political Economy*……2 vols. 1767. vol. I. p. 137. vol. I. p. 305.

『普遍として措定された餘剰、すなわちあらゆる欲望の可能性は貨幣である。貨幣は普遍者であり、この抽象である。抽象はすべてを媒介するが、商業がこの媒介を活動として措定され、餘剰と餘剰とを交換する³⁹⁾。』と述べている。そしてこの觀點からは、商業資本の活動が中心になる。『活動的な・普遍的な交換、その行爲は特殊な欲望と特殊な余剰とを媒介するのであるが、商人身分は、利得の交換における普遍性の最高點である。かれが生みだすものは、かれが特殊に存在する餘剰をとりあげ、それを普遍的なものにすることであり、それが交換するものは同じく貨幣、すなわち普遍的なものである⁴⁰⁾。』

そして Hegel が資本制生産の必然的發展傾向を、一方における富の蓄積と他方における貧困の増大として把握するとき、それは、單純商品生産を資本制生産のなかにもちこみ、混亂せざるをえなかった。『個人の熟練は、かれが生活を維持する可能性であるが、この可能性は全體者の偶然な・完全な混亂に従屬させられている。それゆえに、大衆はまったく鈍化（磨滅化）させられており、不健康で危険な、しかもその熟練にかぎられた工場労働、マニファクチュア労働にまで墮落させられている。そして産業の諸部門は一大階級の人々を雇用しているが、これらの諸部門は他國における發見などによる流行（の變化）や物價の低落などのために一度に涸渴してしまい、この全大衆は、途方に暮れざるをえない貧困に身をゆだねるのである。巨大な富と貧困との矛盾がはじまり、貧者はその境過を改善することができない。富は巨大な力となる。富の蓄積は一部には偶然によって、一部には分配の一般的様式によっておこなわれる。……労働の最大限の抽象性は、作業をもっとも個別化するところまで到達し、その領域を擴げ續ける⁴¹⁾。』このような必然的傾向の定式化は、労働諸條件が賃労働に對立して『資本』として把握されないために不妊である。資本主義的諸矛盾は、ここでみられるように、『偶然』によって、すなわち『自然的な不平等』によって發現する。

39)40) Lasson, S. 474.

41) *Real philosophie*. II. SS. 232—3.

また『法の哲學』では『資本』によって發現する。だが、ここでいわれる資本も、本來の經濟力だけでなく、人間が經濟過程で投下する肉體力の一部をもふくんでいる。ここに資本制生産の結果として労働力そのものが、資本の表現をとる外見に欺かれ、労働と資本との對立を看のがす結果となっている。したがって Hegel が資本制生産の必然的發展傾向を富の蓄積と貧困の増大として把握するとき、それは、理性の實現を妨げる自然的不平等に起因するものとして把握されていることが注意されなければならない。

IV

以上われわれは、『精神哲學』を中心として、Hegel の古典學派の把握をあとづけた。

われわれの把握にしたがえば、Hegel は資本制生産を單純商品生産と同一視し、資本制生産の本質的特徴が剩餘價值の生産であることをみぬくことができなかつた。個々の部分では Smith の攝取をあとづけることができるであろうが、しかし本質的な力からいって、Steuart の經濟學、ないし Steuart と區別されざる Smith の學說のうえにたっていたということができらるであろう。したがって賃銀と労働の價值を混同したとはいえ、労働價值説のうえで、その學說を展開した Ricardo 學說の水準を突破することはできなかつた。したがってまた、この本質的な點からいえば、Hegel は Lukàcs のいうように『Smith のホリゾン』も、Behrens のいうような『Smith, Ricardo を

突破する功績』をも擔うことができなかつた。

しかしここに問題がある。この分野における研究者は多く Marx が Hegel の『精神現象學』を批判した一節、『Hegel は近代國民經濟學の立場にたっていた』ということも Marx が當時みることができなかつたイエナ時代の Hegel の『精神哲學』にも適用していることである。そして論者は『經濟學批判』で述べられた Marx の Steuart と Smith についての見解を並置し、そこから Hegel が近代國民經濟學の立場に立脚していることを論證するものであつた。しかし『批判』の著者も別のところで明らかにし、われわれもそれに従って明らかにしたように Steuart と Smith の立場は、明確に區別されなければならない。両者がひとしく、外見上生産物をつくる労働一般を規定したごとくみられるが、内容において經濟發展の段階が區別されなければならない。したがって『精神哲學』に關するかぎり、Hegel の立場は、階級分化の充分おこなわれなかつた初期資本主義の立場、總じて産業資本の未だ確立されざる單純商品生産者の立場にたっていること、あるいは、その立場のままに資本制生産の分析に移っていることを意味し、Smith によって確立され、Ricardo によって純化、發展された資本制の分析にたっていないことを意味する。このことが Marx の批判とどのように關連し、それが内容的にいかにか規定すべきかはここで把握した見解を基礎として、『精神現象學』そのものを問題にしたうえで、解決されなければならない。